

## 個人競技の構成について

「布」の一次予選から世界選手権大会まで

小林 由美子

### はじめに

新体操競技における世界選手権大会への道は、数回の予選会を通過して、獲得することができる。1977年10月に行なわれた、第8回新体操世界選手権大会〔**Ⅷ World Champion Ships in Modern Rhythmic Gymnastics**〕（スイスのバーゼルで開催）の場合、1年前より始まり、1976年11月、甲府において全日本新体操選手権大会兼第8回新体操世界選手権大会第一次予選会、翌年6月、山形において第二次予選会、同年8月、大阪において最終予選会、の3回、予選会が行なわれた。言うまでもないが、予選会が進むに従い、選手は厳選されていった。一次予選では、団体参加7チーム中7チーム、個人参加33名中20名、二次予選では、団体参加7チーム中4チーム、個人参加20名中12名、最終予選では、団体1チーム、個人3名となり、今回は、団体が本大学チーム、個人も同じく我々の大学より3名が、第8回新体操世界選手権への道を獲得することができ、その中に筆者も入っていたのである。

### 目的

先に述べたように、世界選手権大会の出場が決まるまでには、約1年間に3回の予選会が行なわれ、予選通過後は、次の予選に向ってより良い演技にしていくことが、練習の目的であり、予選通過の手段である。より良い演技として認められるには、採点の対象である実施と構成の二面を、完璧に近いものにしなければならぬ。実施においては、（基礎の出来あがった者を基準として考えて）、内容を繰り返し、繰り返し練習して自分のものにしていく事で達成される。そして、構成では、<sup>※</sup>規則に基づき（今回は個人競技）独創性、難度のとり入れ、伴奏音楽との関係などが、長い期間で練られていく。個人競技の採点の配分は、構成：実施が7：3であり、10点満点で構成が7という割合は実に大きい。そこで今回は、3回の予選会と世界選手権大会で実際に行なわれた筆者の布の演技をとりあげ、その構成及びより良いものへの過程を知り、個人競技における構成の重要性を確かめるのが、目的である。

---

※ 「新体操規則集」日本体操協会発行

## 方 法

- 一次予選から世界選手権まで、4回の試合で撮影した8ミリフィルムをもとに、それぞれの演技を、一定の呼間数（3拍子は12呼間あるいは24呼間、例外として18呼間とし、2拍子は8呼間）に分類し、運動の分析をした。
- 12m四方の床面をどのように使用したか移動図を示した。また、上記で分類した運動がどの位置で行なわれたか移動図に実線で示した。
- 運動の分析をもとに、A、運動別 B、操作別に回数を表に示した。

## A 運動別 (9項目)

- ・波動運動及びその連続
- ・体を曲げる動作
- ・平均姿勢
- ・回転
- ・跳躍及びその連続
- ・姿勢（静止）
- ・捻転
- ・歩、走
- ・その他

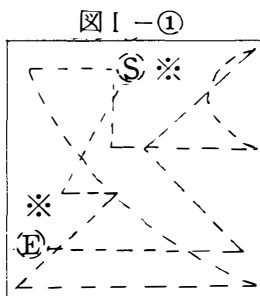
## B 操作別 (6項目)

- ・振る
- ・円運動
- ・螺旋
- ・蛇形
- ・8の字
- ・その他

## 結 果

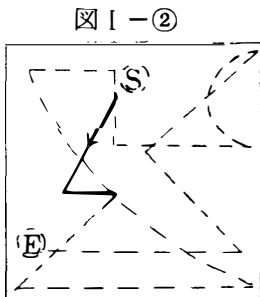
## I 一次予選

左斜前を向いて立ち、布は、左手に持って体前床上におく。12m四方の中心よりやや後方に位置する。



## ①

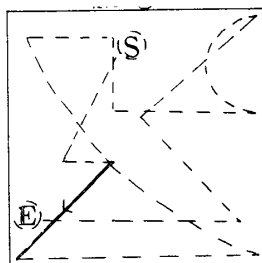
- 1～3 後方に転向し、布を頭上に振りあげると共に後屈する
- 4～6 右足軸で、左足を前方に振りあげると共に回転し、布は左脚下で小回旋した後、右手に持ちかえ、後方に引く
- 7～12 左側屈と共に、左斜上方にら旋をえがきながら、のびあがる



## ②

- 1～3 右手を後方に引いた位置でら旋をえがきながら、右斜前方に進む
- 4～6 左足踏み切りでひきつけとびと共に、布を右体側で大回旋する
- 7～9 布を体前で大回施し、左横へひきつけとびをしてしずみこむ

図 I - ③

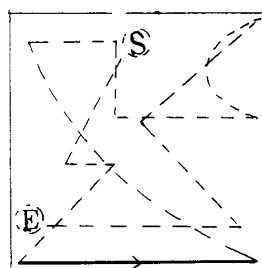


10~12 のびあがりながら、左体側でら旋をえがく

③

- 1~3 右斜前方へ、体回旋と共に回転、布は水平大回旋1回
- 4~6 回転を繰り返す、布は腕下で水平小回旋1回
- 7~9 (1~3)を繰り返す
- 10~12 左体側で布の棒を立て、回転する
- 13~15 布を振りあげ、のびあがる
- 16~18 左へ90°転向し、左体側でら旋をえがく

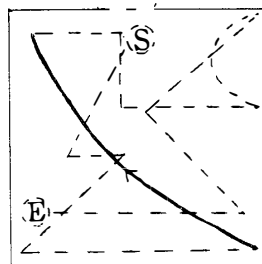
図 I - ④



④

- 1~3 右足を前方に振りあげ後屈と共に、布は、右体側で大回旋1回
- 4~6 同様に振りあげ後屈し布は頭上に振りあげる
- 7~12 右足を大きく1歩出ししながら、布は頭上から体前に蛇形をえがく
- 13~15 左足を1歩横に出すと共に、右足を前交差で甲をつけて出し、布は、体後方で小回旋1回
- 16~18 左へ90°転向し、右足を前にポイントし、後屈と共に、布は右体側で大回旋2回
- 19~24 (1~6)を繰り返す

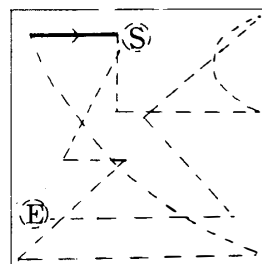
図 I - ⑤



⑤

- 1~3 左へ1回転、その後大きく8の字を1回
- 4 右足を後方に振りあげる
- 5~6 ら旋をえがきながら、右斜後方へ、ジャンプターンの助走をする
- 7~9 左足踏み切りのジャンプターンと共に、布は頭上で水平回旋1回
- 10~12 同じようにジャンプターンをし、右足着地で、回転と共にすわり、すぐに立ち上がる。布はら旋をえがく
- 13~15 (7~9)を繰り返す
- 16~18 右足でホップと共に、腕を後方にひく
- 19~21 後方でら旋をえがきながら半円を歩く
- 22~24 両足をそろえ、左体側でら旋をえがく

図 I - ⑥



⑥

- 1 右足を大きく前方に出して膝まづくと共に、布を右へ大きく振る
- 2 左足で(1)を繰り返す
- 3 (1)を繰り返す

図 I - ⑦

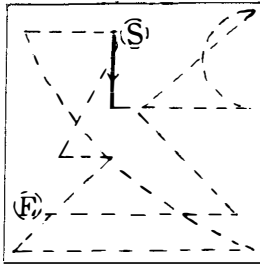


図 I - ⑧

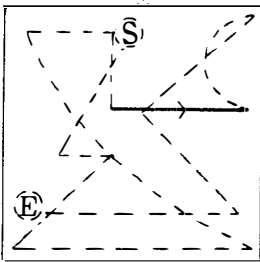


図 I - ⑨

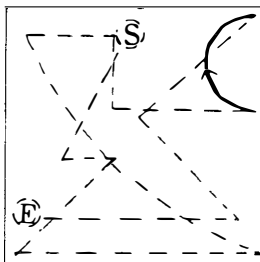
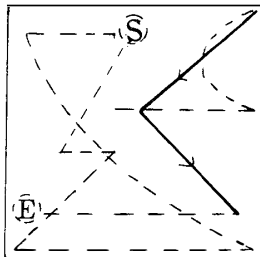


図 I - ⑩



4 (2)と同様に膝まづくと共に、布を左体側で大回旋し、左手に持ちかえる

5 (1)と同じ足で、布は右体側で大回旋

6 (2)と同じ足で、布は左体側で大回旋

7~8 両足をそろえ、右体側でら旋をえがく

⑦

1~3 布を床上で左右に振り、その布の間を左足、右足と歩く

4~6 右に 90° 転向し、大蛇動1回と共に、布は大きく8の字を2回、右体側で右手に持ちかえる

7~9 正面へ転向し、両足をそろえて、左側でら旋をえがき、右足を横に大きく出すと共に、布も右へ引く

10~12 (7~9)と同様に、右側でら旋をえがく

⑧

1~3 布を体前で水平回旋して、その中にとびこみ、左へ回転しながら腰をおろし、布を頭上で1回旋する。

4~6 正面を向き、左手肘をついて、右足を後方に振りあげると共に、布を前方に振る。

7~9 右に回転しながら、布は頭上で1回旋後、ら旋をえがく

10~12 左手支持で腰をひきあげ、右足を後方に振りあげてそり身姿勢を通過し、布は右体側で大回旋する。

13~18 (7~12)を繰り返す

19~24 体前で大回旋と共に、立ち上がり、右に回転する

⑨

1~3 布を体前で内側にひねり、外側にひねり返すと共に持ちかえる

4~6 後方に右足を出して回転しながら、布を腰後方で左手に持ちかえる

7~9 (1~3)を左手で行なう

10~12 (4~6)を左へ行ない、左手に持ちかえる

13~15 左へ回転と共に、布は頭上で回旋する

16~18 のびあがりながら、布は上方に振りあげる

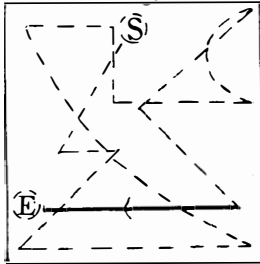
⑩

1~3 布を床上で左右に振りながら、布の間を左足から4歩歩く

4~6 5歩目で左足を、右足の前に交差して出し、静止すると共に、布は左体側でら旋をえがく

7~9 布を右体側で大回旋し、体前で左から蛇形をえがきながら、左斜前方へ進む

図 I-11



10~12 体を右に捻って布を後方に引き、ら旋をえがきながら、左足軸で左へ回転する

⑪

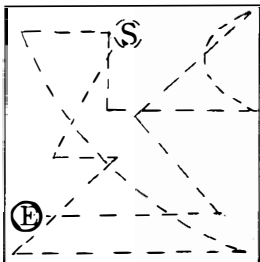
1~3 右側に向い、布を床上で左右に振りながら、布の間を走る

4~6 前後開脚とびと共に、布を右体側に振りあげる

7~9 両足をそろえて、膝をまげてしめると共に、布を頭上から前方に振りおろしら旋をえがく

10~12 左へ180°転向し、左足を大きく出して膝まづき、(7~9)と同様にら旋をえがいた後、腰をおろすと共に、布を後方にひく

図 I-12



⑫

1 布を右体側で大回旋しながら、左へ回転し、左肩が下になるようにねて、そり身と共に、布を頭上に振りあげる

2 布を下方に振り下げながら、小さくなる

3~4 (1~2)を繰り返す

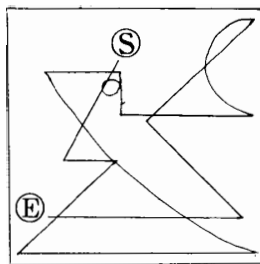
5~6 布を体側で大回旋し、右足左足と振りあげながら右へ回転し、足の間で布を左手に持ちかえる

7~8 右肩が下になるようにねて、下半身を捻り、左足前方、右足後方にして布は後方において静止する

Ⅱ 二次予選

(同じ部分は、番号のみで文は省略する。)

図-Ⅱ・Ⅲ



①

②

7~9 ひきつけとび1回した後、左へ1回転と共に、布は頭上で水平回旋する

10~12 左体側でら旋をえがく

③

回転の際に、左腕も右腕と共に回す

④

⑤

ジャンプターン2回後、すわって立ちあがってジャンプターンは行なわない

⑥

両足をそろえ、布は水平に、右後方へひく(右横を向いている)

1~2 左足から2歩歩くと共に、布は水平に左体側に引く

3~4 体を右に捻り、左足を前交差して正面に出し、布は後方から左体側にもっていき、ら

旋をえがく

- 5～6 左足から2歩歩きながら、布は、大きく8の字をえがく  
 7～8 両足をそろえて後屈すると共に、布は前方でら旋をえがく  
 9～12 右足より大きく4歩で円をえがきながら、布は体前で蛇形をえがく  
 13～14 正面を向いて、左から右へら旋をえがく  
 15～16 体後方で大回旋し、右で左手に持ちかえる

⑦, ⑧, ⑨

⑩

最後にら旋をえがいた後、左手に持ちかえて、体前で大回旋1回

⑪

- 1～6 右へ、左足から3歩歩き、正面を向いて、左足を大きく出して捻ると共に、布を後方に水平にひく、右へ回転しながら、布を体前で、右手に持ちかえる。  
 7～12 右に回転しながら、左足は膝まづき、腰をおろして右足を後方にひき、布は体前から後方へら旋をえがく。12で、布を後方より大回旋して足の方へひくと共に、右膝をまげて小さくなる

⑫

そり身の運動を、右足のまげのばしのみで行なう。

### Ⅲ 最終予選

①②③

④

蛇形を、左から体前でえがく

⑤⑥⑦⑧

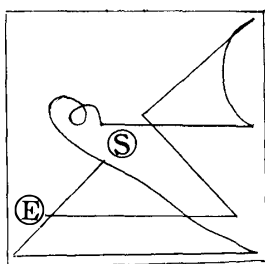
⑨

左手は持ちかえを行わず、内・外とひねりのみを行ない、その後、後方に転向し、布は後方で横蛇形をえがく。正面に転向し、体前で大回転、頭上後方で小回旋して、振りあげる

⑩⑪⑫

### Ⅳ 世界選手権

図-Ⅳ



①

- 1～3 後方に転向し、布を頭上に振りあげると共に後屈する。  
 4～6 右へ回転しながら、布を右手に持ちかえ、頭上で水平回旋1回  
 7～9 右足を横に大きく出すと共に、左足を後方にひき、布を右へ振る  
 10～12 (7～9)を左へ行なう

②

- 1～3 右足を横に出し、左足を右斜前にポイントしながら、布は体前で左から右へ蛇形をえがく。  
 4～6 左足をもどし、右足を後にひきながら後屈、布は右体側で大回旋する

7～9 足踏みと共に、布は体前で小さく8の字を繰り返す

10～12 (4～6)を繰り返す

③

1～3 左足を前交差に出して、上体を右に捻り、布を水平に後方に振る

4～6 軽くとびあがって180°転向し、後方に歩きながら、布を体前で回旋する。

10～12 正面に転向し、右上方に布を振りあげる。

④

1～3 左に回転しながら、布を体前で左手に、腰の後方で右手に持ちかえる

4～6 左体側でら旋をえがく

7～9 左足を横に出すと共に、右足は前交差に甲がつくように出し、布は、腰の後方で小回旋1回する。右足を踏みかえながら、体前で大回旋

10～12 (7～9)を繰り返す

13～15 左足を横に1歩出して静止すると共に、布は、右で蛇形をえがく

16～18 布は蛇形をえがくと共に、左へギャロップ1回

⑤

⑥

1 右足を横に1歩出すと共に、上体を左に捻り、左足を右前方に振りあげ、布は、体前で左から蛇形をえがく

2 左足をもどす

3～4 右足を後方に大きくひき後屈と共に、左足を膝をまげてあげ、布は右体側で大回旋

5～8 (1～4)を繰り返す

9～12 布は体前で蛇形をえがき、右足追歩4回で円をえがく

13～16 正面を向き、左から右へら旋をえがき、体後方で大回旋して、左手に持ちかえる。

⑦ ～ ⑫

以上が、一次予選から世界選手権大会まで、4回の試合で行なわれた「布」の運動内容である。移動図に多少の変化はあるが、運動自体は、同位置で行なわれていた為、一次予選で示したような、点線と実線の移動図は、二次予選からは省略した。又、最終予選の移動図は、二次予選と変化がなかった為、図Ⅱ、Ⅲとして、二次予選の所で示した。

次の表は、身体の運動からみた分類、及び带状布の操作からみた分類で、各フレーズ(①～⑫)でどのような運動(操作)が何回行なわれ、全体でどれだけ、その運動(操作)が行なわれたか、又、4回の試合をⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳとして、どのような変化が見られるかを示した。表-Aでは、波動運動及びその連続、体を曲げる動作、平均姿勢、回転、跳躍及びその連続、姿勢、捻転、歩、走、その他の9項目に、座運動をつけ加え、10項目とした。これは、他項目との重複が、考えられる。表-Bでは、振る、円運動、ら旋、蛇形、8の字、その他、の6項目に、左手の演技の回数をつけ加えることにした。(同様に、他項目との重複あり)一般的に、右手の演技が多くなるわけだが、その中には、必ず、左手の演技をとり入れなければならない。\*

身体の運動からみた分類 表-A

	波動運動				体を曲げる動作				回 転				跳 躍				平均姿勢				捻 転				歩・走				座運動				その他							
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV				
①					1	1	1	1	1	1	1	1												2																
②								2		1	1		2	1	1									1	1	1	1	1												
③									4	4	4													1				1												
④					2	2	2					1					2	2	2		2	2	2	2																
⑤					1	1	1		2	2	2	1	4	3	3	3									1	1	1	1	1	1	1		1							
⑥						1	1	2													1	1	2		1	1	1	1	1								1	1	1	1
⑦	2	2	2	2																					1	1	1	1												
⑧									6	6	6	6	1	1	1	1																	1	1	1	1	1	1	1	1
⑨									2	2	2	2												2																
⑩									1	1	1	1					1	1	1	1	1	1			2	2	2	2												
⑪										1	1	1	1											1	1	1	1	1												
⑫					4	4	4	4																									1	1	1	1				
計	2	2	2	2	8	9	9	9	16	18	18	13	8	5	5	4	3	3	3	1	2	4	4	11	6	7	7	7	4	3	3	2	2	1	1	1				



带状布の操作からみた分類

表 - B

	ら 旋				蛇 形 (横)				蛇 形(縦)				回 旋 (大)				回 旋 (小)				振 り				8 の 字				そ の 他				左 手											
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV								
①	1	1	1													2	1	1	1		1	1	1	3													1	1	1	1				
②	2	2	2									1	2	2	2	2												1																
③	1	1	1										2	2	2	3	1	1	1		1	1	1	2					1	1	1													
④				1	1	1						1	1	5	5	5	3	2	2	2	3	1	1	1	1																			
⑤	3	3	3	3									3	2	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1																				
⑥	1	3	3	1						1	1	3	3	4	4	2						3	2	2																				
⑦	2	2	2	2																		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1	1	1				
⑧	3	3	3	3									5	5	5	5	1	1	1	1	1	1	1	1																				
⑨							1	1					1	1	1	2			1	1	1	1	1	1					2	2	1	1	1	1	1	1								
⑩	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1			1	2	2	1																												
⑪	2	1	1	1	1								1	1	1							1	3	3	2												1	1	1	1				
⑫													2	2	2	2						4	4	4	4												1	1	1	1				
計	17	18	18	13	3	2	2	2	1	2	2	5	24	26	26	26	6	6	7	6	14	16	16	16	1	1	1	2	3	3	2	1	4	5	5	5								

個人競技の構成について

どの試合で、どの部分が変わったか、大まかに分類したものが、下の表である。①は、一次予選から二次予選で変化し、その後、世界選手権まで変化しなかったもの、とし、以下同様の要領で、記号で示した。(表-C)、次に、各試合での得点を記す。(表-D)

表 - C

	試 合	フ レ ーズ
①	(I) - (II・III・IV)	⑪
②	(I) - (II・III) - (IV)	②⑥
③	(I・II・III) - (IV)	①③④
④	(I・I'・III'・IV')	⑤⑨⑫
⑤	(I・II・III・IV)	⑦⑧⑩

表 - D

試 合 名	得 点
一次予選	9.50
二次予選	9.65
最終予選	9.85
世界選手権	9.20
平 均	9.55
(国内平均)	9.70

個人競技の採点の配点は、「新体操規則集」において、次のように定められている。

演 技	構 成	難度要素の価値	5.00
		独創性及び技術価値	1.00
		伴奏と演技との関係	1.00
	計	7.00	
実 施	演技の正確と安定性	1.50	
	一般印象	1.50	
	計	3.00	
	総計	10.00	

#### 構成7点の内容

難度の評価	5点
音楽と動きの関係	1点
構成技術価値	0.5点

難度の配分、難度の論理的連続、難度の多様性、リズムの多様性、床面の使い方、床面の移動と方向

構成の独創性	0.5点
--------	------

新要素の導入と結合

#### 実施3点の内容

技 術	1.5点
一般印象	1.5点

確実性、優美性、調和、力動感、軽快性、動きの大きさ、個性と表現力

## 考 察

4つの演技の構成を分析し、文章に記したわけだが、①～⑫までが変わりなくあてはまることから、演技全体の流れは変えていないことがわかる。床面の利用も、図-I、図-II・III、図-IVを見てわかるように、ほとんど変わっていない。①と⑥の位置が試合が進むにしたがい、中心に近くなっているだけであり、これは、左後方で行なっていた演技を意識的に前に出し、より見せようとしたのである。

では、試合ごとにどのように変化しているかを見ていくことにしよう。

## ＜一次予選 ～ 二次予選＞

この時期に変化した所は、②⑤⑥⑩⑪であり、そのうち大きく変化したのは⑥と⑪である。まず⑥を見てみると、この運動は、この作品の中で最も特徴のある動きの部分である。※Ⅰでは「片足膝立ちの踏みかえ連続と振り、8の字の組み合わせ」であり、運動として補強的で大変つらい運動である。見た目にも強さを感じさせる。その点、※Ⅱでは「左右の振りと共に歩-※捻-歩-※屈」で、体の複雑な捻りを中心に動きが見られる。

⑪の運動は、Ⅰは「床面左右振りの間の走-※跳-姿勢」、Ⅱは「歩-捻-回」でやはり動きへと変化している。前者は、⑩で左右振りの間の走を行なっているという点でも除くのが好ましいと思われる。

②は、ひきつけとびを1回転に変え、⑤では、立ち上がりからの跳躍を除いている。これらは、正確に行なわれていなかったことが、内容の変化につながったのであろう。

⑩は次の運動のつなぎとして、1つ運動が増えただけである。

これらの事を考えあわせると、2次予選では、多少跳躍系が減っており、部分的に動きを増して来ていると見られる。

## ＜二次予選 ～ 最終予選＞

最終予選では、大きく変わったところはない。部分的に変ったのが、④で縦蛇形が横蛇形になり、美しさは見られる。又、⑨の運動では、左手のひねりから持ちかえを止めている。繰り返しはなるべく避けた方が良く、左手において正確に行なわれていなかったということが原因と見られる。

構成面で変化させなかったのは、期間的なもの（2次予選6月、最終予選8月）が関係していたのかもしれない。どんな試合でも、そうではあるが、特に最終決定戦においてはミスは絶対に許されないのである。「数多くの選手の中から厳選された者ばかりであるから、この段階になると、演技の差はほとんどなく、失敗した者が負ける」のである。実施面を重視し、完璧なものにしなければならなかったのである。こういった理由から、この期間には、構成に手をつけなかったということが理解されるであろう。

## ＜最終予選 ～ 世界選手権大会＞

最終予選を通過すると、目指すは、世界である。この点を頭に入れて見ていこう。大きく変

※Ⅰ 第二次予選会の演技

※Ⅱ 第二次予選会の演技

※捻 捻転の意

※屈 体を屈げる動作の意

※跳 跳躍の意

※回 回転の意

化しているのが前半(①～④と⑥)である。まず表-Aの捻転のⅣが増えていることが明らかにわかる。Ⅰからでは+9であり、Ⅲからでも+7である。全体を見ても、ほとんどの部分に入ってきている。他を見ると、回転13回、跳躍4回、平均姿勢2回であり、これらの運動が減った分、捻転へと変ってしまったようである。又、操作上では、ら旋はⅠより4回減少、蛇形はⅠより4回増加という点が目立つ。Ⅰで蛇形が極端に少なく、片寄が見られたが、この程度入れれば良いであろう。

前半の1つ1つを見ていくと、①の演技の入りは、Ⅰ・Ⅱ・※Ⅲまで「転向-屈-回-屈」であったのが、Ⅳは「転向-屈-捻-捻」となっており、先の捻転の1つである。捻転の際に、左右の振りを共なっており、この事が大きさを増し、アクセントによって強さが感じられる。

次の②は、Ⅲまで、跳躍系であったのが、全く雰囲気を変え、「捻-屈-歩-屈」となっている。移動性のあるものから、定位置となり、繊細な動きの線をたっぷりと見せている。このような入りによって、作品全体の雰囲気が変わってくるであろう。

③は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが「回転の連続」であったのが、「捻-歩」となり、前者は運動の数が多く、スピーディであるが、後者は大きな捻転1回とさがりながら布の回旋というように、数からいうと少ない。が、運動が小さくなったわけではなく、少ない動きをいかに大きく動くかを見せようとするものなのである。リズムは、回転連続の平凡さに比べて、捻転でアクセントをつけ、さがりで少しずつもり上げていく事で、リズムの変化がみられる。

正面を横切る④の運動は、Ⅲまで「平-平-捻-屈-回」で、正面を向く捻転を除くと、体側を見せる運動が、ほとんどをしめている。Ⅳは、「捻-捻-姿勢-回」(捻転は前者と同様の動き)で、正面を向き、左へ移動する型になっている。前の③と同じように、運動の数からいうと、減っているが、運動がより大きくなり、1つ1つの運動が見せ場となっている。

ⅠとⅡ・Ⅲですでに2つの運動を行なった⑥の動きは、リズムも他がすべて3拍子であるのに対し、この部分のみ2拍子で、曲も大変印象に残るところである。Ⅰでは躍動的に、Ⅱ・Ⅲでは、体の捻りを見せ、Ⅳにおいては、「捻-屈-捻-屈」と繰り返しになっている。Ⅲまでの移動を共なったものに対し、定位置で、繰り返し動きを強調し、見せ場としている。この3種の運動(Ⅰ～Ⅳ)は、3種共に、それぞれ違った雰囲気を持ち、同じ曲であっても、動きによって、いろいろな変化をするものである。本研究では、構成中心で実施にふれることを避けていたが、Ⅱ・ⅢとⅣの運動はどちらをとりあげて見ても、良い動きであるが、自分のものになるまでには、長い時間と練習を必要とした。それ程、動き方が高級であり、手具操作の難度とは、又ちがった練習が要求されるのである。

以上がⅣにおいて再構成された点であり、それらをまとめて見て、言える事は、世界に向けての演技というものを常に頭に入れて考えられていたということである。運動において、より良い動きというものを見せるのは捻転の運動であり、それを豊富にとり入れたわけである。又、部分的にわかったように運動の数が減っているが、それは運動をより大きく見せる為でもあり、特に筆者の場合、小柄な為、いかに大きくのびのびと見せるかが大変重要なことだった

※Ⅳ 世界選手権大会の演技

※平 平均の意

※Ⅲ 最終予選会の演技

のである。数多くの運動をやるのではなく、数は少なくし、大きな動きでいかにより良い動きを見せることができるか、それを研究して出来たのがこの試合での演技だったのである。

## ま と め

本研究で、さらに、個人競技における構成の重要性が確められたわけだが、各試合における得点表-Dを見て、一次予選から最終予選の段階では、演技の向上が、実にはっきりと表われている。しかも、どの試合でも、演技の失敗はなかったのも、その得点は、より正確であり、比較の上で、困難はない。

新体操競技において、得点がすべてではないと言いながらも、やはり、勝つのは、得点の高い者である。特に、最終予選では、「世界選手権への権利=優勝=高得点」でなければならなかった。1年間で、構成を練り、このような結果となったことは、大変良いことであるが、さて、次の世界選手権となると、得点は、同様に失敗なし9.20で、最終予選に比べて、-0.65、一次予選と比べても-0.3であった。この結果から、世界へ向けて、動きのみに重点をおくことは、困難が多いようであった。しかし、日本の新体操も、発展してきている上で、世界の新体操へ近づいていることは確かである。そこで、これからの課題は、世界へ立ち向かうための構成、及び動きづくりであり、これから、ますます研究を続けていきたいと思う。

## 参 考 文 献

- 「新体操規則集」 日本体操協会発行
- 「新体操図解コーチ」 加茂佳子著 成美堂出版 S53.1.10発行
- 「女子の新体操」 遠山喜一郎他著 大修館書店 S53.9.5発行
- 「新体操、個人競技における難度の変遷」 卒業論文(Gコース) S52年度